

院外茶話

vol.90 平成 24 年 11 月 1 日

最初の腕時計はセイコー
いくつか買い換えたけど
携帯電話があるので
時計を持たなくなった

僕の時計は スイス製

中学に入学して初めて革靴を履いた。お祝いにもらった万年筆も嬉しかったけれど、新品の腕時計は 5 分毎に眺めて、時間を確かめたものだった。

手巻きの機械時計で、確かキングセイコーと言った。当時としては最新式の腕時計で、分解掃除がいらぬという優れものだった。



キングセイコー。かつての名品です。

その後何度か買い替えたはずの時計は記憶になくて、大学を卒業したときに手に入れたロレックスを、今でも時々使う。同じ機械式でも自動巻きで、日付も表示されるようになった。

欠点は 2、3 日、身に着けないでいると、ゼンマイが伸びきって止まってしまうこと。それにオーバーホールに出すと、大金がかかる。

デジタル時計が出回った今日、新品を買った方ははるかに安いので、今は引き出しの中にしまっている。たまにネジを巻いて、腕につけると不正確な時を刻む。

やがて動力はゼンマイから電池に変わって、長持ちをするようになったけど、どんな時計もいずれは止まる。唯一止まらないのが日時計で、

世界初の時計は古代エジプトでできた。

小学校の時分、自宅の庭に棒を立てて、工作の授業で習った日時計を作ったことがある。実際の時間を見ながら、棒の影が示す部分に文字盤を描いただけのものだった。



40 年も愛用している私の逸品です。

こうして作った日時計の影は、時計回りに動く。しかし、これは日本の話であって、南半球に行けば反対回りに動く。ついでだが、朝顔の蔓も北と南では反対向きに巻く。

日時計は季節が変わると、多少ずれるけれど、曇っていないければ役に立つはずだった。しかし、たいがいは学校から帰ると、まず家の柱時計で時間を確かめて、それから日時計を見に行ったので、ほとんど意味がない。

この時計も、しばらくは時を刻んでいたが、いつしか文字盤が消えてしまった。

時刻そのものを知ることより、ろうそくや線香を燃やして、時の長さを測るのが燃焼時計。水時計や砂時計も同じ原理で、ストップウォッチの役割をする。

こういう道具がない時は、自分の脈拍数で代用できるが、この場合は階段を上ったり、走ったりすると時間が狂う。

今の時計らしきものが登場したのは 11 世紀。その動力は錘であった。昔懐かしいハト時計で、朝、鎖を引いて錘を上げると、これが歯車を回しながら、ゆっくりと降りてくる。

こうして回る歯車の速度を一定に保つのが振り子で、その原理を発見したのは、あのガリ

レオであった。ガリレオと言えば落体の法則も発見した。太陽の黒点も、木星の衛星も見つけた偉大な研究者である。

最大の業績は何と言っても地動説で、当時の宗教裁判で破門にされたけれど、あの有名な一言を残した。

「それでも地球は回っている。」

法王によって、その破門が解かれたのは何と1992年というから、その間に振り子は何回振れたことだろう。



ゼンマイを使った機械時計の中身は。

やがて、大航海時代を迎えるとイギリスで時計が作られ、大陸横断鉄道ができれば、時計産業の中心はアメリカに移る。

第一次世界大戦に突入すると、西部戦線に延々と続く塹壕から、兵士が一斉に突撃をするために、小さな懐中時計が発達した。

それぞれの事情を抱えて、時計は世界中で進化をしたが、スイスの時計が有名になったのは、18世紀に入ってから。それは単に正確な時を刻む便利な道具ではなく、宝飾を施した贅沢品であった。

時計とはあまり縁のなかったスイスが、高級時計を作ったのは何故か。その理由は宗教改革であった。

質素を旨とした信教徒の多いジュネーブでは、度々贅沢禁止令が発令されたが、こういう法令には必ず抜け道がある。元々装飾工芸が盛んだっただスイスで、この法律ができると、職人たちは時計に豪華な装飾を施して、贅沢品に変えた。名目は時計で、これは法に触れないから。

日本に時計産業が起きたのは20世紀の初頭で、高級感はなかったけれど、日本製は安くて正確、それに頑丈だった。わざわざヘリコプターを使って、上空から腕時計をばらまいて、壊れないところを見せつけたくらいだから。

20世紀も後半になると、機械式の時計は下

火になって、より正確なクォーツ、セシウム時計の時代が到来する。

文字盤もデジタル表示になった時計が、千円単位で手に入るようになると、まるでビニール傘のように、使い捨ての感覚になった。最近では携帯電話にも炊飯器にも時計がついていて、私は時計を身につけるのをやめた。

スイスの時計産業も、ずいぶんダメージを受けたけれど、この世から機械時計がなくなることはない。人々が安物に飽きた時、超高級なファッションアイテムとして蘇った。

オメガ、ダンヒル、モンブラン、パテックフィリップ……。数十万円からあるけれど、高価なものは1千万を超える。

こんな歴史を見ていると、もう一度時計を持ってみたい気持ちになるが、その時は新品を買ったつもりで、昔のロレックスをオーバーホールに出してみようと思う。



精密機械産業にはこんな空気がよい。

成人式の日 Cartier

成人式の日、駅前で婦人物の時計を拾った。ピカピカではなかったけれど、Cartierと書いてあった。

思うに落とし主は、馴れない腕時計をして、浮かれて歩いていたのだろう。つまり振袖を着て、ありったけのお洒落をした、20歳のお嬢さんに違いない。

こんな想像をしながら交番に届けて、拾った場所や時間など、いろいろな質問に答えた。そして最後に、謝礼は辞退したけれど、どんな人の時計か知りたくて、持ち主がわかったら電話を一本欲しいと告げた。

すると、数日後に一人の婦人から電話があった。時計を届けて下さってありがとうございますと。あの時計はもう数十年も使っている宝物で、二度と手に入らないアンティークでした。そして婦人はこうも言った。

「20歳でなくてすみません。」